

天野為之と唐津

池 尾 愛 子

天野為之は、国際貿易は世界を変え、日本も変えたと確信していた。彼は 1861（万延元）年に、唐津小笠原家の江戸藩邸で生まれ、少年時代に北九州の唐津で過ごした⁽¹⁾。天野の経済思想や経済学講義に、唐津藩の治水・新田開発、殖産興業に関する政策、海防意識が反映されているので、伝記を書くためにはその歴史をたどる必要がある⁽²⁾。一方で確かに、唐津藩の政策史と学問史は江戸時代の幕藩体制の縮図のような特徴をもつ。他方で唐津藩の歴史は日本人が西洋人と貿易を営み始めてしばらくの時期に始まり、長崎監務の任は他藩にはない。幕末には佐幕・開国派の老中小笠原長行（ながみち）が輩出し、維新後に彼により江戸屋敷に唐津出身者の交流のための久敬社が設けられた。

第一節では豊臣秀吉と肥前名護屋・長崎との係わりをみる。第二節と第三節で唐津藩史をたどる⁽³⁾。第二節では初代大名の寺沢家の藩政と、領有していた天草での乱を取り上げる。第三節では、唐津藩の殖産興業と長崎監務に注目し、天野の『徴兵論』（1884）を論じる。第四節では、天野の江戸屋敷での誕生と

(1) 天野為之の生年月日については、木下恵太の「天野為之について」（2011）や「2011 年度秋季企画展『早稲田四尊生誕 150 周年記念天野為之と早稲田大学展』（2012）を参照する必要がある。

(2) これまでの天野為之研究は、池尾愛子（2012, 2013a, 2013b, 2014, 2015, 2016, 2017, 2020a, 2020b）を参照のこと。天野為之は池尾愛子『日本の経済学』（2006）には登場しないが、英語版（Ikeo 2014）には登場する。

唐津での少年時代、高橋是清からの英語教授、小笠原長行との係わりをみる。第五節では、天野の二年に満たない政治生活をみる。彼は明治憲法が公布されると、第一回と第二回の衆議院選挙に佐賀県から出馬した。

1 唐津の賑わい

北九州沿岸の唐津は海上交通の便利よく、海（玄界灘）を越えて大陸・半島の人々の往来があり、稲作は日本で最初にこの地に伝えられた。東松浦半島と糸島半島の間唐津湾を擁し、岩々をたくわえた海岸線、碧い海、季節の木々や花々が彩をそえ、風光明媚である。海と山の幸に恵まれ、強風と荒波、森で覆われた丘陵をうまく使えば、自然が外敵からの防御を助けてくれた。

平安時代中期、松浦（まつら）党と称する武士団が、現在の佐賀県・長崎県（平戸・対馬）にまたがる地域で活動を始めていた。源久（みなものひさし）が松浦党の始祖とされ、1069（延久元）年に、御厨検校および検非違使として今福（現在の松浦（まつら）市）に上陸して加治屋城を築き、松浦氏を名乗って土着したとされる（『唐津探訪』57-58頁）。松浦党や近隣地域の人々は、玄海灘から東シナ海まで自由に航行できる船を建造しそれを操る技能を有していた（『唐津探訪』59-60頁）。

16世紀半ば、カソリックのポルトガル人、スペイン人に続いて、新教のオランダ人、イギリス人が到来して貿易が進んだ。ポルトガルの宣教師たちは日本人の知的好奇心を刺激し、布教のために貿易商から受ける寄贈に加えて、貿易に手を染め、そして貿易の条件としてキリスト教徒になることを求めたの

(3) 本稿での唐津藩史については、唐津商工会議所編『唐津探訪』（2012）、唐津市史編纂委員会編『編纂唐津市史』（1962）、岩生成一『鎖国』（2005）、辻達也『江戸開府』（2005）、杉谷昭他『佐賀県の歴史』（2018）、瀬野精一郎他『長崎県の歴史』（2012）など、できる限り標準的文献から構成することに努めた。部分的に司馬遼太郎の「街道をゆく」第11巻、第13巻、第17巻も参照した。唐津史を理解するために唐津市の郷土史誌『末盧国』を読むように勧められた唐津市教育委員会の岩尾峯希氏に感謝する。

で、貿易と宗教が密接に結びついていた。オランダ人とイギリス人は貿易と布教を切り離しており、両者の間ではオランダ人が競争に勝ち東アジアの貿易を独占するに至る。

宣教師たちは大名たちに熱心に布教し、受洗後は神社仏閣への付け火を教唆したので、攻撃的な宗教対立の種が撒かれていった。一方で、大名たちは戦国の世を反映して武器を所望した。1580（天正19）年、大村純忠（すみただ）は貿易にひかれて、長崎と茂木（もえぎ）を教会に献上した（『鎖国』57-60頁）。長崎に港町が造営され（『鎖国』47-83頁、『肥前の諸街道』179頁）、領内の神社仏閣は焼かれた。1581年、豊臣秀吉（1537-1598）は長崎から神父ガスパール・コエリヨを呼び出してその理由等を詰問した（『肥前の諸街道』193頁）。他方で、キリシタン大名の家臣が南方に出かけ貿易を始めると、西洋人貿易商たちと競合し、争いになった。秀吉は禁教に踏みだしたものの、貿易振興策は維持したため、徹底はされなかった。

海岸の村々を襲う海賊が出没したが、太閤秀吉の「海賊禁止令」（1589年）が徹底されて姿を消す（『鎖国』126-128頁、『唐津探訪』60頁）。

豊臣秀吉の夢と野望 唐津の人々と大陸・半島の人々との交流は一時期途絶えたことがあった。太閤秀吉が北九州を平定し、半島への出兵を決めた時である。秀吉は、松浦半島の北端（現在の唐津市北西部・鎮西町）に拠点となる肥前名護屋城を築かせた。名護屋城は、松浦（まつら）党の名護屋氏の居城であった垣添（かきぞえ）城を土台にして、1591（天正19）年10月に、黒田長政、小西行長、加藤清正たち九州の諸大名によって築城が開始された。設計は黒田官兵衛、面積は約一七ヘクタールで、当時としては大坂城に次ぐ大きさであった（『唐津探訪』70-71頁）。唐津と名護屋（鎮西町）を結ぶ名護屋街道（名護屋往還）も整備され、「太閤道」とよばれるようになる（『唐津探訪』73頁）。

首都機能が大坂から一時的に移転された名護屋城はたいそう賑わった。

文禄・慶長の役 1592（文禄元）年、秀吉は遠征軍を肥前名護屋に集結さ

せた。その数、出征軍約 20 万、内地予備軍約 10 万にのぼり、内訳は表 1「太閤秀吉の遠征軍（名護屋）」のとおりであった。

4 月 12 日、第一軍が対馬を発して釜山浦に着いた。「仮道入明」（明への通過許可）を要求したが、無回答だったため、翌日戦端が開き、第二軍以下も上陸した。波多三河守は第二軍に属し、鍋島直茂の旗下として 2,000 名の部下を連れて出陣した。名護屋城主の経述は戦死した。5 月 2 日、加藤清正と小西行長らが漢城（現ソウル）を占領した。両氏は分かれてさらに進み、小西は平壤を陥れた。しかし翌年、明の軍に平壤を奪われ、漢城は守りとおし、明との間で交渉が始められた。交渉は長引いて決裂し、1597 年、慶長の役につながった（『唐津市史』471-475 頁）。

秀吉の名護屋滞在は二度で、延べ一年三ヶ月ほどであったとされる。秀吉は

表 1 太閤秀吉の遠征軍（名護屋）

第 1 軍	18,700	小西摂津守行長
第 2 軍	20,800	加藤主計頭清正
第 3 軍	12,000	黒田甲斐守長政
第 4 軍	14,000	島津薩摩守義弘
第 5 軍	24,600	福島右衛門大夫正則
第 6 軍	45,700	毛利安芸守輝元
第 7 軍	19,200	宇喜多宰相秀家
第 8 軍	15,550	浅野左京大夫幸長
第 9 軍	25,470	岐阜少将羽柴秀勝
海 軍	9,450	九鬼大隅守嘉隆
	205,470	
予備軍 36 隊	73,620	徳川家康
親衛隊	28,795	富田左近将監

『唐津市史』470 頁

主に城内の山里丸で過ごし、半島出兵の陣頭指揮をとる一方で、国内政治に指示を出し、茶会や能会も催していた。秀吉は名護屋滞在中に、平戸に来ていたスペインのフィリピン長官使節と会い、世界への関心を高めた（松浦家年表、2019年12月28日閲覧、『鎖国』489頁では秀吉は宣教師と会ったとなっている）。

1598（慶長3）年に、秀吉が没し、大名たちが撤収して戦役が終わるまでの七年間、名護屋・唐津はたいそう賑わっていた。こうした賑わいぶりは、現在にいたるまでこの地域の人々によって語り継がれている。また半島から連れて来られた人たちの中にいた陶工が九州各地に窯を新たに開き、約半世紀後に磁器の生産が伸びてゆく。「唐津焼」も知られるようになり、輸出が可能になる（『鎖国』477頁、『島原・天草の諸道』）。新しい産業・事業を興す時には専門家を招くと効果的なことが学ばれたであろう。

上松浦党を率いてきた松浦藩主の波多三河守は、岸岳に築いた山城を居城として地盤を築いていた。波多三河守は半島出兵で半数以上の兵を失うほど積極的に関わったのであるが戦果が少なかったとして、お家取り潰しとなる（『唐津探訪』69頁）。鬼ヶ城主草野鎮永（しづなが）も秀吉に所領を没収されて滅びてゆく（『唐津探訪』76頁）。

秀吉の寵臣から譜代大名へ 1592（文禄元）年、秀吉は長崎を直轄領（天領）として⁽⁴⁾、本博多町に奉行所をおき、寺沢志摩守（しまのかみ）広高（尾張出身）を奉行に任命した（『長崎県の歴史』146頁）。広高は有力家臣を派遣して貿易管理にあたらせた（『長崎県の歴史』146頁）。秀吉没後、名護屋城は広高に与えられ（『唐津探訪』72頁）、寺沢氏が上松浦一帯を領有することになる。広高はさらに筑前怡土（いと）郡まで領地を広げる。

しかし、広高は関ヶ原の戦いで一転して徳川方について戦功を立て、飛び地になる肥後天草郡（現熊本県）も領地とし、4万石を加えて、計12万3,000石

(4) 「長崎奉行」<https://www.pref.nagasaki.jp/koho/bugyo/bugyo/top.html> 長崎県ウェブサイト、2021年5月3日閲覧。

の大名となった（『唐津探訪』82頁）。

徳川家康は1603年に長崎奉行につき寺沢広高に代えて小笠原一庵為宗を起用し、長崎貿易の直接管理に乗り出してゆく。寺沢氏の唐津藩政は次節でみるように、島原・天草の乱が元になり二代で途絶え、その後、譜代大名による転封が続くことになる。

2 唐津藩政（1）城下町づくり

徳川幕府の成立 徳川家康は1590（大正18）年に関八州に封じられて江戸城に入っており、豊臣秀吉亡き後は、伏見城において執政にたずさわった。1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いで家康は石田三成たちを破り、1603年に征夷大将軍に任命されて江戸幕府を開いた。家康は、関ヶ原の戦いで石田側についたが陳謝した宗氏に対馬の領地を安堵し、朝鮮との国交を回復させ貿易を続けさせた⁽⁵⁾。

1609（慶長14）年、大船召上げ令が実施された。これは西国大名による兵力輸送を防止することを狙った措置であったが、彼らが貿易目的で遠洋航海に出ることも困難にし、朱印船貿易を断念することになった（『鎖国』325、326頁）。1636年、寛永13年の鎖国令が出されて、キリシタンの数は急減する。しかし後述のように1637年からその翌年にかけて島原・天草の乱が勃発し、その数か月の間、事態が反転する。

1641年6月（寛永18年5月）、オランダ人たちは幕命により、平戸から長崎に移り（『肥前の諸街道』91頁）、同年9月には、医薬・航海・天文関係以外の洋書の輸入が禁じられた（『鎖国』364頁）。

治水と防風 唐津の寺沢志摩守（しまのかみ）広高は、旧主波多氏の家臣団を含む旧武士を庄屋または郷足軽としてとりたてる融和策をとり、「元和の

(5) 司馬遼太郎『壱岐・対馬の道』（「街道をゆく」13、2008）、山本博文監修『江戸三〇〇藩物語藩史』（2015）。

検地」を完成して、知行制度と身分制度を確立した（『唐津市史』478頁）。また広高は1602年から七年をかけ、名護屋城を移転するようにして唐津湾沿いに唐津城を築き、城下町を整えた（『唐津探訪』72頁，75頁）。志摩守は築城に際し、松浦川、波多川（徳須恵（とくすえ）川）、神田（こうだ）川（町田（ちょうだ）川）の流れを変える大掛かりな治水工事を実施して、河口と唐津湾が唐津城の外堀機能を担えるようにした（77頁）。川の流れを変える治水工事は江戸時代の典型的公共事業の一つで、後年、天野為之は政府の役割の中に入れて

いる。

松浦川の改修工事のおかげで、大雨のたびに氾濫していた土地が洪水から救われ、新田開発も推奨され、さらに城下町の一部にもなった（77頁）。

広高は強い潮風から農作物を守るために、クロマツの植林事業も敢行した。唐津城の東の外町から松浦川を渡った先に、クロマツを幅四百から七百メートル、長さ四・五キロメートルにわたって、唐津湾にそって植えたのである。虹の松原と呼ばれるが、400年後の現在では密林のごとく茂っていて、上空写真を眺めると筆でゆるやかな弧を描いたように見える（82頁）。防風林造営も江戸時代の典型的公共事業であった。

要塞としての城下町 城内と、町人町である内町（うちまち）が堀で囲まれ、北側には唐津湾が位置し、出入りの木戸は三か所に限られた。東に札の辻、西に名護屋口、南に町田口が設けられた。内町では東西方向と南北方向に道が敷かれ、新町、八百屋町、米屋町、呉服町、中町、本町、木綿（きわた）町、紺屋町、横町（のちの京町）、刀町などがおかれた（『唐津探訪』78頁，75頁）。札の辻橋を渡った東の外町には材木町、汐屋町、魚屋町、大石町、水主（かこ）町などがあり、名護屋口を出た西側には寺町、弓町、のほり町、鉄砲町（のちの江川町）があった。現在、その町割りと町名は四百年前とほとんど変わっていないという（75頁，78頁）。

水野時代にあたる文化年中（1804～18年）の城下町の職業が、松浦拾風土

記等によって伝えられている（『唐津市史』701-702頁）。

民間職業では、酒屋24軒、糶屋21軒、豆腐屋15軒、呉服屋5軒、紺屋16軒、肴屋86軒、菓屋5軒、質屋10軒、馬士20軒、寺36軒のほか、日雇頭1軒、山伏6院、医者1軒である。寺の36軒は多いとされた。御用商、職人では、船問屋12軒、八百屋1軒、米問屋3軒、材木屋1軒、鍛冶1軒、御使者屋守1軒、大工棟梁2軒、木挽棟梁2軒、砂官1軒、畳師1軒、桶師兼屋根師1軒、瓦葺2軒、鍛冶棟梁1軒である。

唐津17町には、男1,547人、女1,422人、総数2,969人が住んでいた。『唐津市史』（479頁）によれば、水野・小笠原の時代の農民人口は6万人前後であったとの記録が残っている。彼らは少なくとも他藩と同程度に「生かさぬよう殺さぬよう」なぎりぎりの生活を強いられていた。唐津藩では農業を基本としつつも、漁業が盛んで、するめ（鯛）、干鰯、いりこ（煎海鼠、干なまこ）、干鮑の商品価値が高かったとされる。

古式捕鯨と手漉き製紙 室町時代末期に尾張（愛知県）や紀州（和歌山県）で組織的な近海捕鯨が起こったとされる（103頁）。唐津では、1615～16年頃（元和の初期）、寺沢志摩守広高が紀州から漁夫を雇い入れ、波多氏の旧臣中尾氏が小川島を拠点に突取法の鯨組を組織した（『唐津探訪』104頁）。一方で、寺沢氏の家臣豊屋氏も鯨組を組織しており、主家没落後、平戸・生月（いきつき）島に移り、平戸藩主に益富の名を贈られて「日本一」といわれるほどの捕鯨の実力を西海で誇るようになった（105頁、平戸市生月町博物館「島の館」ウェブサイト）。

広高は手漉き和紙の製造も農家の副業として推奨したとされる。製紙は後の水野時代に隆盛になる。

島原・天草の乱 1637～38（寛永14～15）年、二万数千の農民、牢人たち（有馬家の旧臣など）が、天草四郎をかつぎ上げて一揆を起した。蜂起した一揆衆が立て籠もった原城の発掘や関連調査が20世紀末から一挙に進展し、

宗教対立の機微が改めて注目されるようになっている⁽⁶⁾。それでも次の二つの原因は挙げておくべきであろう。第一に、島原と天草の石高が、水増しされて4万2千石と4万石と定められ、重税につながっていた。1659年、幕府の直轄領になった後の検地に基づいて島原の石高は2万1千石に半減される。天草も同程度であったと推測されている。第二に、1634年から悪天候で不作が続いていたにもかかわらず、年貢の取立ては厳しかった。そのままでは大勢が牢屋で絶命すると予想され、死を覚悟しての決起であった⁽⁷⁾。

島原は有馬晴信、天草は小西行長というキリシタン大名の旧領で、幕府の禁教政策でキリシタンの数は急減した。そして信徒に対して行っていた責苦が、年貢を納められない領民に対して行われていた。苦境の中で元信徒の「立ち帰り」が起り、改めての布教と非改宗者に対する攻撃が始まった⁽⁸⁾。天草では仏閣を建立するなどの対策が進められたが、年貢を払えない領民が海に投げ込まれるなどしていた。

蜂起した一揆衆は島原城・富岡城（天草）を落とすことはできず、島原の古い原城に立てこもった。老中松平信綱が九州諸大名2万7千から3万7千人を指揮して、3か月後に原城を攻略し平定した。反徒は密告者一人を除いて全員処刑されたともされたが、21世紀初頭の調査により城の内外での出入りがあるなど事態はより複雑なことがわかっている。そして幕府は海禁・禁教を徹底してゆくが、キリシタンは長崎・島原に潜伏した。

二代藩主寺沢兵庫守堅高（ひょうごのかみかたか）は領内で起こった乱の責任を問われて天草4万石を没収された（『唐津探訪』82-83頁）。1647（正保4）

(6) 石井進・服部英雄編集『原城発掘：西海の王土から殉教の舞台へ』（2000）。

(7) 辻達也『江戸開府』（2005）、349-351頁、422-449頁、司馬遼太郎『島原・天草の諸道』（「街道をゆく」17、2008）。永積洋子『平戸オランダ商館日記』（2000）第4章「平戸時代の終末」によれば、島原・天草の乱は同日記では「農民による蜂起」とされた。

(8) 神田千里『島原の乱：キリシタン信仰と武装蜂起』（2018）、五野井隆史『島原の乱とキリシタン』（2014）参照。

年、堅高が江戸藩邸で自害すると継嗣無しとして寺沢家は断絶、領地は一時天領となった（83頁）。大名の末期養子が許可されて嗣子がなくとも取り潰されなくなるのは、1651（慶安2）年以降の事である（『唐津市史』571-2頁）。名護屋城跡に残っていた城壁は、島原・天草の乱の後、反徒がこの城壁を利用することを恐れ、主要な石垣まで壊すことになった（『唐津探訪』72頁）。

長崎監務と外様大名の監視 寺沢氏が二代で絶えた後、唐津藩は譜代大名による転封が続いた（表2）。徳川幕府は、唐津藩を長崎監務や九州の外様大名の監視役として位置付けた（『唐津探訪』83頁）。唐津藩の譜代大名たちは特徴のある藩政を分かりやすく実施し、唐津藩主の任の後はそれぞれ出世してゆくことになった。ただ、松平時代までは行政資料の事務の引継ぎは一切なかったとされる⁽⁹⁾。既述のように、土井・水野両家における唐津領引継ぎ文書にあたる覚書は残っている（『唐津探訪』156頁）。

寺沢氏没落後、大久保忠職（ただもと）が1647（慶安2）年に明石から転封した。大久保氏は忠職、忠朝（ただとも）の二代で30年在封した（83頁）。

表2 唐津藩歴代藩主

寺沢家	1598（慶長3）年～
	12万3千石 → 8万3千石
大久保家	1647（慶安2）年～
	8万3千石
松平家	1678（延宝6）年～
	7万石（怡土郡1万3千石上知）
土井家	1691（元禄4）年～
	7万石
水野家	1762（宝暦12）年～
	6万石（藩領10ヶ村1万石上知）
小笠原家	1817（文化14）年～
	6万石（藩領43ヶ村1万石上知の上）

(9) 早川和見『古賀藩』（2011）、103頁。

この時代に、従来の地方知行（じかたちぎょう）を廃して蔵米知行（俸禄制）として支配を強化した（83-84頁）。さらに、庄屋が各村を転勤して回るという転村庄屋の制度をつくり、転封大名が庄屋を官僚の末端機構にすえるきっかけとなり、これについては幕末まで続いた（84頁）。

唐津を代表する秋祭り「唐津くんち」は、寛文年間（1661～73年）に神事である神幸（しんこう）として始まった。長崎、博多でも「くんち」と呼ばれる秋祭りが、神事として実施されてゆく。「唐津くんち」は後の1819（文政2）年に、本体を大きくして台車に載せて「曳山」の形をとるようになる。

1678（延宝6）年、大久保忠朝が下総（しもうさ）の佐倉に移封し、同地から松平乗久（のりひさ）が入封した（84頁）。その際、怡土郡1万3千石が幕府に上知され、松平氏の領地は7万石となった（84頁）。松平氏は三代一四年在封した。

松平氏は1691（元禄4）年、志摩の鳥羽に移封し、同地から土井利益（とします）が入封した（84頁）。

3 唐津藩政（二）学問奨励と殖産興業

土井家の時代 土井氏は1691（元禄4）年以降、四代72年在封した。土井氏の時代は、文治政治の風潮が強く、藩校盈科堂（えいかどう）が設置される一方、代官を辞した吉武法命（よしたけほうめい）が始めた塾教育が盛んになった（84-85頁）。盈科堂は土井氏の転封先に移転することになるものの、民間塾は継続し、唐津に学問や教育に熱意をもって向き合う伝統が現在にいたるまで根づくことになった。

吉武法命の教育方法はモダンであった。それは、講書、輪読、討論、学論（数名の講師が討論するのを塾生に聴かせ、討論が終わってからその是非を塾生に述べさせる方法）により学的攻究心と批判力を養い、そして学び得たものを実践させることであった。そのため、代官時代からの縁故である庄屋や豪家に塾

を建てるように依頼したのであった（『唐津市史』757頁）。

法命は40年間塾を続け、その教育の内容は多岐にわたり、生涯をかけて奥東江流の学問を教授しようとしていた。奥東江は実学派の人で、中江藤樹の学徳を慕い、儒学医を含め、多くの師について学び、朱子学派というよりは陽明学に近かったとされる（『唐津市史』759頁）。土井利益が鳥羽にいた時に東江を迎え、入封先の唐津に伴わせたのであった。「郡奉行や長崎勤番などの役職を仰せつかり、彼の学を實際政治の上に行ったので、領民の悦服と尊敬とを一心に集めた」とされる（『唐津市史』731頁）。奥東江や吉武法命は「学理と実際」を一致させていたといえ、この学徳は時を超えて天野為之には伝わったのかもしれない。

しかし奥は賄賂禁止を提案して受け入れられなかったのを機に、唐津を離れて老母の病を診に行った。母を看病してその死を送り、唐津に戻ろうとするが本人も病に倒れて帰らぬ人となった（『唐津市史』732頁）。

唐津の産業 土井家の頃に、唐津焼が知られるようになって、商人が経済力を持ち始める（『唐津探訪』85頁）。

炭田は、享保年間（1716～36年）に発見された。松浦川・巖木（きゅうらぎ）川流域の地下に、豊かな炭田が広がっており、開発が進んだとされる。

鯨組の中尾氏は呼子に屋敷をかまえ、港から五キロほど離れた小川島に捕鯨の拠点をおいていた（106頁）。三代目の頃に最盛期を迎える。鯨の捕り方が宝暦年間（1751～64年）に、突取法から網取法に変わった。これは網を掛けて鯨の泳ぎを抑えてから突取を行う方法で、日本独特とされる。西海での捕鯨にむけて、夏頃から船の修理と新造、網、銚、剣、包丁、鯨油樽の製造が行われ、年末頃から捕鯨開始となった⁽¹⁰⁾。捕鯨に参加する人数は一組で600から700人、船は40から50艘、納屋場で鯨をさばく人たちが数百人で、捕鯨は一

(10) 平戸市生月町博物館「島の館」ウェブサイトには、生月島の益富組や呼子の中尾組の捕鯨活動が描かれていて参考になった（<https://www.hira-shin.jp/shimanoyakata/>、2021年6月3日閲覧）。

大産業であった（106頁）。

天野為之は冷静に近海捕鯨をみていた。「鯨一頭捕れば七浦潤う」とまでいわれたものの、鯨が近海に来なければ仕事はまったく不安定な生業であった。明治維新後に藩の保護がなくなると、欧米の遠洋捕鯨の影響もあり、古式捕鯨は衰退した。中尾家は1877（明治10）年に廃業した（106頁）。その後、ノルウェー式砲殺や母船式による近代捕鯨法が主流となってゆく。

水野家の入封 1762（宝暦12）年、土井利里が下総・古賀へ転封となり、代わって、三河の岡崎から水野忠任（ただとう）が入封した。1762年の転封の際、怡土郡のすべてと松浦郡のうち浜崎村など10ヶ村1万石が上知されて幕府領となり、その上で水野氏の所領は6万石のままとされたので、財政的に苦しくなった（『唐津探訪』85頁）。さらに、忠任は岡崎からの転封に際して長崎の豪商から借りた借金を返済しなければならなかった（『唐津市史』）。

忠任は藩財政を確保することだけをめざした改革を実施しようとして、領民たちの反発にあった。虹の松原一揆が起こり、増税を含めた改革は失敗した。領民たちは、慣例となっていた免租地への新課税、年貢納入時の升の量り方の変更、楮・干鯛の専売制の導入に反対したのであった。水野氏は、忠任、忠鼎、忠光、忠邦の四代で56年在封した（『唐津探訪』85頁）。

水野氏の藩政 水野氏は藩財政を助けるため、紙漉きを藩の事業として専売化し、上質紙をつくり大坂などに出荷して名声をえた。石州（島根県）から楮（こうぞ）の苗を取り寄せて藩内で栽培し、採れた楮皮を藩に納入させる一方、石州からは紙漉き職人も雇い、農民たちに技能を習得させたのであった（『唐津探訪』138頁）。

二種類の紙がつくられた。「半紙」は「京花紙（きょうはながみ）」ともいわれる婦人用のうすい高級懐紙である。「白保」は障子紙や帳面用に使われた（138頁）。

石炭が寛政年間（1789～1800年）に、家中の燃料として使用されるように

なり、普及し始めた。

水野家から小笠原家へ 1817（文化14）年、水野忠邦は遠江（とおとうみ）の浜松へ移封し、幕府の寺社奉行になる。のちに老中になり、天保の改革を行って世に知れ渡る。移封に際して、大川野、巖木など藩領43ヶ村1万石が上知された

小笠原長昌が陸奥・棚倉から入封した際、同家の拝領高は水野時代と同じ六万石とされ、小笠原氏も財政的に苦勞した。巖木は唐津藩に戻され、1864（元治元）年から1868（明治元）年にかけて、石炭による藩収入は歳入の4分の1に達した（『唐津探訪』117頁）。

開国から維新へ 安政の開国前後が唐津炭生産のピークで、1853（嘉永6）年の長崎への唐津炭の出炭（7,000万斤）は筑豊炭（3,000万斤）を上回った（1斤は約600グラム）。幕府が1854（安政元）年にアメリカ、イギリス、ロシア、オランダと和親条約を結ぶと、1855年7月、唐津領沖を3～4艘の異国船が往来し、沿岸警護の重要性が増した。1857年6月には安政の仮条約が結ばれており、8月には呼子に入港した阿波の船によってコレラ（「トンコロリン」と呼ばれた）が持ち込まれて多くの死者を出し、社会不安が広がった⁽¹¹⁾。伝染病の流行は国際化・グローバル化にともなって目立つようになり、治療や感染拡大防止に努める過程で科学的態度が定着していったと考えてよいであろう。幕府は1858年に右の4ヶ国およびフランスと通商条約を締結し、翌59年6月に、神奈川、長崎、函館の三港を開港した。

小笠原長昌の子の長行（ながみち）は江戸で藤田東湖や土佐の山内容堂などに師事した後、1857年に唐津藩世子（世継ぎ）となり、翌58年に藩主長国（養父）の名代（藩主代理）として唐津に戻った。『小笠原壱岐守長行』（1943）に

(11) 本項の唐津藩史については、『唐津探訪』に加えて、小宮陸之「唐津藩」（1966）、岩井弘融『開国の旗手 小笠原長行』（1992）、唐津市教育委員会「明治維新150年 唐津の明治維新と近代化」（2018）を参照した。

は、長行が藩政改革に取り組む一方で、長崎監務に出かけたことが記されている。1858年2月には、製鉄所を見学、海軍伝習所の勝麟太郎（海舟）と懇意になり、彼の案内で蒸気船に乗ったほか、オランダ総督スクーネルを訪問し、唐館で清国商人3人と会談した。1859年11月、長行は長崎奉行・目付と会談した。開港が進み、スコットランドの貿易商グラバーが来日していた。次は1861年3月で1週間滞在した。『小笠原壱岐守長行』に具体的な行動が記されていないが、後述するロシア艦ボサドニック号の対馬・芋崎占拠事件の報に接したと推測できる¹²⁾。藩内では大殿派（長国）と若殿派（長行）の対立があったともされる。

小笠原長行は1861（文久元）年5月、江戸に上り、幕府の奏者番（そうじゃばん）、若年寄、9月には老中に昇進した。そして1862年に長行は外国御用係として生麦事件の処理に臨み、10万ポンドの償金を払うと、尊王攘夷論者に攻撃されて蟄居謹慎を命じられた。しかし1864年に蛤御門の変がおこり、幕府の長州征伐が決定されると長行は謹慎をとかれた。1866年の第二次長州出兵の際には將軍家茂から全権を委任されたが、敗色が濃厚になり家茂逝去の報が入ると、長行は側近とともに小倉城を脱出して行方不明になった。長州藩は新型の大砲を新たに備え、士以外の民が最新のライフル銃などで武装して、將軍と他の諸藩を相手に士気高く闘い、勝利した。徳川封建制と身分制に風穴があいた。そして維新後に唐津藩は苦しい立場におかれることになる。

次節でみる通り、唐津藩は明治維新に際してさらに大きな打撃を受けたので、藩主小笠原長国が危機感を持って藩政改革に臨むことになる。

ロシア軍艦による対馬の一部占拠事件 対馬は韓半島と唐津の間に位置し、藩主宗氏が治めていた。幕府は対馬を開港していなかった。1859年4～5月には長崎を出港したイギリス艦が対馬に立ち寄り、水深を測量したり、乗組

12) 小笠原壱岐守長行編纂会編『小笠原壱岐守長行』（1943）、岩井弘融『開国の旗手 小笠原長行』（1992）、29-30頁。

員を上陸させたりするなどした後、釜山の和館に向う事件が発生した。1861（文久元）年2月にはロシアのコルベツト艦（満載排水量1,000～1,500トン）ポサドニック号が来航して、浅茅（あそう）湾内に停泊し、3月に芋崎に移動して占拠し、海軍基地建設のために土地の租借を強要する事件が起きた。ロシア領事は函館にのみ駐在していた。

この事件はロシア太平洋艦隊司令官リハチェフ海軍大佐が引き起こしたもので、ロシア政府の意図したものではなかった⁽¹³⁾。とはいえ、日本政府（幕府）の抗議だけで退去させることはできず、駐日イギリス公使オールコックらの介入により、8月にロシア艦はようやく対馬を離れた⁽¹⁴⁾。唐津の人々にはこの事件は伝わっており、さらに後述する東京の久敬社に集った天野為之たちは小笠原長行から詳しく聞く機会があったであろう。政治家志望であった天野為之の心には国防力の強化、技術水準の向上、兵力の向上が大きな課題であることを刻み付け、『徴兵論』（1884）の執筆につながったと推測できる。

遡れば、1808（文化5）年8月にイギリス艦フェートン号がオランダ国旗を掲げて不法に長崎に入港する事件が起きていた⁽¹⁵⁾。1823年8月から1829年12月まで、ドイツ人であることを隠してフィリップ・シーボルトが医者、博物学者として長崎オランダ商館に滞在し、出島の外で医学塾を開き、1826年には江戸参府に随行した。彼は離日後、ヨーロッパで日本情報を提供し、1859～61年に再来日を果たした。息子のアレキサンダーは駐日イギリス公使館に勤務した⁽¹⁶⁾。

ロシアは1858年の清との愛琿条約、60年11月の北京条約により、ウスリ

(13) 真鍋重忠『日露関係史 1697～1875年』（1978）、293頁。日野清三郎著・長正統編『幕末における対馬と英露』（1968）。佐伯弘次編『壱岐・対馬と松浦半島』（2006）、150頁。

(14) 1860年の咸臨丸（コルベツト艦）の渡米・太平洋横断の翌年のことであった。

(15) 長崎警衛の当番の佐賀藩の防備体制が手薄であったため、イギリス艦は難なく退去した。片桐一男「フェートン号事件」『国史大辞典』、藤田覚「フェートン号事件」『世界大百科事典』、加藤榮一「フェートン号事件」『日本大百科全書』参照。

(16) A・ジーボルト、斎藤信訳「ジーボルト最後の日本旅行」。

川以東の沿海・アムール地区を共同管理からロシア領に移していた。そしてウラジオストクを開き 1860 年に海軍基地を設営していた。翌年にロシア艦が対馬の一部を占拠したのであった。ロシアは 1891 年にシベリア横断鉄道建設に着手し、1903 年にモスクワとウラジオストクが鉄道で連結され⁽¹⁷⁾、1904 年からの日露戦争において将兵と軍需物資の輸送に活用される。対馬海域においては、日本海軍がロシアのバルチック艦隊（太平洋艦隊）を迎え撃つことになる。

天野の徴兵論 1884 年 2 月に出版された『徴兵論』は天野為之の最初の著作である。もちろん、ロシア艦による対馬の芋崎占拠事件は、海防を考える識者にとって重大事件であった。それだけではなく、天野は維新後に、元外国御用係老中の小笠原長行から、日本に派遣されていた欧米の外交官への対応や、彼らの軍隊・部隊のようすを文字通り臨場感もって聴いていたことであろう⁽¹⁸⁾。イギリス、フランス、オランダ、アメリカの 4 ケ国が連合してと長州藩を攻撃した下関戦争（1863 年と 1864 年）にみられるように、日本と条約を結んだ国々は軍隊・部隊を派遣しており、彼らの間で連絡を取り合って行動していた⁽¹⁹⁾。1868～9 年に日本国内で戊辰戦争が繰り広げられている間、西洋諸国は軍事力を誇示しながら、新政府には徳川幕府が締結した不平等条約を引き継ぐことなどを条件にして、基本的に中立姿勢をとって事態の推移を見守っていた⁽²⁰⁾。

1871 年の廃藩置県を経て、諸藩の軍隊から、中央集権下の軍隊への変更・編成が急速に進み、兵学校も設立されてゆく。天野の『徴兵論』は全 74 頁のコンパクトな本で、1883 年の改正徴兵令を機に論点整理を目標にして、小野

(17) Sydney Giffard (1994) *Japan Among the Powers, 1890-1990*, p.13.

(18) 天野為之は、米英での研修を終えて帰国していた小野梓（1852-1886）からも関連情報を得ていたであろう。大日方純夫『小野梓』（2016）などが参照される。

(19) アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』（Satow 1921）上巻、第 9～11 章。下関戦争での敗退は、長州藩を攘夷・鎖国から開国へ転換させ、倒幕の準備を加速させた。

(20) アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』（Satow 1921）下巻、148 頁。

梓の東洋館から出版された。天野は西洋諸国が武力において日本に勝っており、「今日の世界はなお禽獣の世界にして道德の世界にあらざればなり」(4頁)と戦争に巻き込まれる恐れがあることを示唆し、国防の必要を説いてゆく。「兵力を養って本邦の独立を保持すべきこと」は識者が揃って唱導する所である(6頁)。天野は、「軍器を改良し、あるいは軍術を進歩させるのは兵力を養う一大手段なり」、「軍器と軍術とは人を擁して初めてその効果が上がる」と説いてゆく(6頁)。

その上で、西洋諸国の制度の相違が詳しくおさえられて、志願制と徴兵制の長所と短所を、財政、兵力、交際、政治の面から具体的に比較するかたちで論点が整理されてゆく。まず、志願制、すなわち「男子が兵役に入ると入らざるとは之を人々の自由に一任するの制度」をとるのは、当時ではイギリスとその所領の国々であった。志願制の下では、軍人が一種の職業となり、「兵役に誘うを得る」ためには、「世間相当の給与を付与する」ことを約束しなければならない(8-9頁)。それゆえ、財政負担は大きい。

次に、徴兵制は「強迫制度」とも呼び替えられ、「男子が兵役に就くことは人々の義務」とする制度であり、財政負担は低くなる。ただ、国によって免除規定の多寡に差がある。免除特例が多い徴兵制を布くのは、当時のトルコ、ブラジル、ベルギー等である。免除特例が少ない徴兵制を布くのは、プロイセン、ロシア、アメリカ、スウェーデン、イタリア、オーストリアである。免除特例が少なければ、徴兵期間は短縮することができる(8頁)。

静かな抗議 改正徴兵令によれば「およそ3年を常備の年限」としており、常備軍3万人は、徴兵期間3年、適用者1万人で維持することができる(51頁、57頁)。また同令によれば、官立学校の卒業者は一年の服役とされたが、「私立学校の卒業生の学力を計ることができれば、官立学校の卒業生と私立学校の卒業生とは同一の処置を受けることになる」とのみさりと書かれた(59頁)。

兵力の面では、「戦争の術が文化と共に改良進歩」しており、いよいよ煩雑・緻密になってきている（15頁）。維新以前の日本の封建的身分制度の下では武士が農工商を見下していたが、「改良進歩」は工の身分の者たちによって支えられている。交際の面と関係するが、徴兵制の下では、貧富の差、身分の差、平時の職業の差を問わず兵役義務があり、工の身分を含めて、軍隊で相互に交際・交流することができる。政治の面からも、「有事に際して兵たらしめ 平生にありては尋常人たらしむ」ことにより、ある種の平等が生まれるといえる（23-25頁）。これは暗黙のうちに、日本でイギリスのように志願兵に頼ると、軍人になる人々が旧武士階級に片寄る可能性が高いことが念頭におかれてみるとよい。徴兵制の採用が、武士階級の特権を崩し、身分制に基礎をおいた日本的封建制を確実に壊してゆくことにつながることを期待されていた。

もっとも、徴兵制は「文明の進歩を妨害し殖産の発達を障碍し自由の主義を抑制するの勢」いを持ち、「殺伐の気風」を養成して捕虜の銃殺など残忍行為につながるがあると、天野は認めていた（61, 73頁）。しかし、普仏戦争（1870～71年）で敗れたフランスを見れば、まだ「国力を回復せずプロシアと拮抗するを得ざる」状態である（63頁）。いったん敗戦すると容易に国力は回復しない。一国の安寧と幸福を求め、人類の独立と幸福とを全うするために、不公平のない全国皆兵が望まれたのである（31, 43, 45頁）⁽²¹⁾。

4 天野為之の少年時代

漢方医の子息 遡るが、天野為之は1861年2月6日（万延元年12月27日）に、唐津小笠原家の江戸藩邸詰の藩医（漢方医）天野松庵と妻鏡子の長男として生まれた⁽²²⁾。医者は文人・儒者と共に、士農工商の四階級身分制度からはみ

(21) 本項をまとめるにあたって、松下芳男『明治軍制史論』（1956）、北岡伸一『明治維新の意味』（2020）、司馬遼太郎『花神』（大村益次郎の物語、1976）を参考にした。

(22) 木下恵太「天野為之について」（2011）、木下恵太「2011年度秋季企画展『早稲田四尊生誕150周年記念天野為之と早稲田大学展』」（2012）参照。

出た存在であった。江戸時代の漢方医たちは、長崎の出島での交易から手に入る薬剤や医学書に注目しており、制限されていたとはいえ貿易利益の享受者であり、実際に彼らは貿易問題（開国）に大いに関心をもっていた²³⁾。

唐津行き 1867（慶應3）年10月14日に徳川慶喜が大政を奉還し、12月に王政復古の大号令が発せられた。翌年には鳥羽伏見の戦に続き、慶喜征伐の令が発せられて、歴史が転換した。小笠原長行（明山）は老中職を免ぜられ、官位を剥奪されてしばらく行方不明とされた。小笠原長行は大政奉還後も旧幕府を支持して、唐津の藩士（お伴の者たち）とともに、唐津入封前の陸奥・棚倉（現福島県）に行き、会津藩・新撰組などと合流して奥羽越列藩同盟を形成し、函館に遠征した。さらに旧幕府軍敗北の前に、長行はアメリカ船で函館から江戸に戻りしばらく潜伏した後、外国からの（嘘の）帰国届を提出して受理された。長行は生麦事件の処理以来イギリス公使館通訳アーネスト・サトウと何度か会っていた²⁴⁾。

江戸時代から明治時代への幕末維新の動乱のさなか、天野一家は一時的に千葉に身を寄せた。父松庵が1868（慶應4）年6月8日に病没したあと、母鏡子は、為之と弟喜之助を連れて、藩地に帰ることを決意し、横浜から海路をとり唐津に向かった（浅川榮次郎・西田長壽『天野為之』5頁）。

既述のように、鎖国時代、長崎の出島は江戸幕府直轄でオランダと合法的な対外関係が築かれた唯一の地「西欧文化の門戸」であり、佐賀藩や福岡藩は長崎警備を任務にし、唐津藩は長崎監務（かんむ）や九州の外様大名の監視役を担当していた。これら諸藩は西洋文明に接する機会に恵まれていたが、唐津藩

23) ベッティナー・グラムリッヒは「藩医と将軍による政策」（Gramlich-Oka 2010）において、江戸城内に勤務する医師工藤平助（1734-1800）に焦点をおき、平助の娘で著述家の只野真葛（1763-1825）の著作から医師や文人たちとの知的ネットワークを再構築して、平助が経済改革と外国貿易（特に薬品輸入）に対する関心を仲間と共有していたことを明らかにしている。

24) アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』（Satow 1921）上巻、第7章。勝海舟がサトウに新政府の情報を提供していた。小宮陸の「唐津藩」（1966）、209-210頁。

は世子が徳川将軍側についたため維新に際して大きな打撃を受けた。最後の藩主長国はようやく危機感を持って藩政改革に取り組んだ。そして国運の発展を期すための企画として浮上したのが、英語学校の設立であった。

高橋是清の英語教育 担当教師には、東京・新橋あたりに無職でいた高橋是清（1854-1936）に白羽の矢が立てられた。彼は後に初代商標登録所長、初代特許庁長官、日本銀行総裁、首相、大蔵大臣になる。高橋は11歳で横浜のクララ・ヘボン（1818-1906、ジェームス・カーティス・ヘボンの夫人）やアレキサンダー・アラン・シャンド（1840-1930）に接して英語を学び始め、1867年7月に仙台藩からアメリカに派遣され、騙されてオークランドで奴隷労働をしながらも勉強し、1868年12月に帰国した。彼は1869年1月に東京の大学南校に入学し、そして3月からは教官となるものの、翌年には辞して無職となっていた。そこへ唐津行きの声がかかり、高橋としても心機一転、決意したのであった。

高橋は1871～2年頃の2年弱にわたって、攘夷志向の唐津で、若き俊英達（13～14歳）に英語を教授した。彼は唐津の耐恒（たいこう）寮でも、かつて大学南校においてと同様に、日本語はなるべく使わないようにして、一切を英語で教えた。そして、唐津港に外国船が石炭を積みに来た時、船長に申し入れて、天野を含む生徒14～15名に外国人との会話を体験させたこともあった。まもなく、習った生徒が教えるクラスも始まり、2年目には、生徒数は50人から250人に増えた。

高橋は『自伝』で、「当時の始めからの生徒で、今世の中に知られて生存しているのは、天野為之博士、曾根達蔵博士、今唐津にいる工学士の吉原礼助君、裁判官の掛下重次郎君、銀行家の大島小太郎君らで、その他故人となった者には、化学者の渡辺栄次郎君、工学博士の辰野金吾君、西脇、山中、鈴木の諸君がある」と、当時の生徒たちの最初に天野を挙げ、かつ東京で学ぶことを勧めているので、天野に強い印象を持ったとみえる⁽²⁵⁾。

維新时期の唐津 周囲が漢籍を読んでいたの、高橋も漢文で『日本外史』と『国史略』を読んだ。天野為之も漢籍をかなり読んでいたことであろう。彼の入学した東京大学文学部では、漢文学が第三年級までのカリキュラムに入っていた。高橋は1872年の正月に近隣の島(呼子の小川島と思われる)に出向き、鯨の到来を待ち、はたして勇壮な捕鯨を見物することができ楽しんだ。子鯨につづき親鯨が獲れた祝いに酒樽を贈ると、夜になっていろいろな部位の鯨肉が送られてきた。新鮮な鯨肉はいつも食する鯨肉とはまるで味が違って美味であった⁽²⁶⁾。

佐賀藩と唐津藩はいずれも現在では佐賀県に属するが、面する海はちがっている。唐津からは玄界灘を越えると韓半島やロシア大陸が意識されるのに対して、佐賀からは長崎と有明海を越えると東シナ海が広がり中国大陸が意識された。唐津・佐賀などに跨って天山(標高1046メートル)があり、両地に住む人々にとって海とその向こうについての意識に相違を発生させたようだ。この時期、佐賀藩出身で東京専門学校(現早稲田大学)を創設する大隈重信と、天野為之が会合する機会はまだなかった。

再び東京へ 1869(明治2)年6月17日、諸藩は版籍を奉還し、旧藩主は藩知事となった。1871(明治4)年7月には廃藩置県が実施された。藩知事小笠原長国は東京に転出、高橋是清も東京に戻った。高橋の生徒たちは高橋を追うように東京に出てゆき、1878年に旧藩主小笠原家当主の長行の屋敷の一室を借りて毎月1回の茶話会に集り、「久敬社」と呼んだ⁽²⁷⁾。天野為之は1873(明治6)年に東京に出て、1875(明治8)年に開成学校に、1877(明治10)年に東京大学予備門に入った。天野は1878(明治11)年に東京大学の学部に進んだ。天野は1882(明治15)年7月に、東京大学文学部政治理財科を卒業

(25) 高橋是清口述・上塚司編『高橋是清自伝』上(1936)、再版、中公文庫、110頁。

(26) 高橋是清口述・上塚司編『高橋是清自伝』上(1936)、再版、中公文庫、115-6頁。

(27) 「久敬社のあゆみ」久敬社塾ウェブサイト <http://kyukeisha.com/about/history.php> 2021年2月12日閲覧。

して文学士となり、東京専門学校（現慶応義塾大学）の創立に与り維持員兼講師となって、『経済原論』になる内容の講義を始めるのであった。その前に、天野の一年余りの政治生活を見ておこう。

5 天野為之の政治生活

天野為之は、1889（明治22）年2月11日の明治憲法（大日本帝国憲法）発布を受けて、1890年7月1日の第一回衆議院議員選挙に、佐賀県第二区から郷党会の候補者として出馬して僅差で当選した。国会開設は文明国日本を築く上での重要な一歩であった。タイやエチオピアなどアジア・アフリカの国々にも、国家の独立・植民地化回避のために必要なステップと映ったようだ。第一回総選挙の全体結果は、民党（自由党・改進黨）勢力が多数を占め、吏党（政府支持派）が少数であった。

天野の政治生活については、浅川榮次郎・西田長壽の『天野為之』（1950）に詳しい²⁸。簡潔に記せば、天野はかつて国会さえ開かれれば国民の代表として一挙に藩閥官僚内閣を打倒して国民の期待に応えなければならないと考えていたので、当然立候補を決意した。佐賀県は三選挙区に分けられ、彼が出馬した第二区は北側の東松浦郡と西松浦郡からなっていた。県内には同成会と郷党会の二つの潮流があり、郷党会は改進黨の系統であった。大隈重信の出身地であり改進黨の勢いが強かった。新進知名の天野は、激戦の末、在郷の名士河村藤四郎を798票対781票で破って当選した。

第一次山縣有朋内閣 第一回帝国議会は1890年11月25日に召集され、天野は予算委員として活動した。1891年1月31日の全院委員会で、第一から第五までの高等中学校、女子高等師範学校、音楽学校を廃止する案が提示され、天野は異見を出した。2月14日の本会議において、天野は修正意見を出し、

²⁸ 浅川榮次郎・西田長壽『天野為之』（1950）、136-148頁。

調査が十分であるとは言えず信ずべき資料がないので、軽々しく廃止を決定すべきではなく、1891年度については各費目について節減を加えて存続すべきと主張したのであった。藩閥政府と議会多数派の民党の対立が激しかったものの、第一議会を無事に終了すること（国際的アピール）が優先されたようである。

第二議会は1891年11月21日に召集された。天野は第八部に属し、鈴木昌司他一名により地租条例案が提出され、第一議会において、天野は経済学者として同案に賛成した。

第二議会は、政府予算案に対して野党側が794万円余りの削減を主張して譲らなかったため、12月25日に解散された。

第二回総選挙と選挙干渉 第二回総選挙は1892年2月15日に実施され、「わがくに選挙史上空前絶後ともいふべき大干渉下に闘われた」（前掲、147頁）。佐賀県全三区で郷党会から立候補した3名は、天野を含めて全員が落選した。

衆議院事務局編纂の『選挙干渉ニ関スル参考書類目録』（1892）は、吏党側の選挙干渉とそれに対する民党側の抵抗、各地での暴動と死傷者の発生、その取調べ、選挙当日の憲兵隊派遣等につわる記録資料（全189頁）である。特に高知と佐賀での妨害・騒動が酷く、高知県で死傷者が最も多く、佐賀県はそれに次いだ。高知では憲兵が派遣されて騒動が収束したが、佐賀では、憲兵に加えて陸軍の歩兵が派遣された。実際、『目録』において「佐賀県選挙干渉始末」は26頁にわたり、取り上げられた17府県（東京を含む）の中で最も長い。154頁には、「民党候補者の天野為之氏、二月十日早朝、唐津より伊万里に赴く途中、数十名の悪漢に要撃せられ、天野氏は腰部を打撲せられ、同行の賀来昌幸は額に三ヶ所傷を受けたるに始まる」等と書かれている（カタカナをひらがなにして、読点を追加した）。

末木孝典の「明治二十五年・選挙干渉事件と大木喬任—佐賀県を事例として—」（2012）によれば、佐賀県第二区では、第一回選挙で落選した河村藤四郎

が吏党側から再出馬の勧誘を受けたが逡巡したため、県議会議員の川原茂輔が擁立され、811票対650票で天野を抑えて当選した(300-301頁)。天野は政治生活をこれで完全に断念した。もちろん選挙干渉は重大な問題である。しかし『目録』掲載の記録書類からはそれを深刻な問題として取り上げ、将来は未然に予防してゆこうとする固い決意が読み取れる。

後記

本稿は令和3~5年度科学研究費助成事業 基盤研究費(C)〔「日本の経済思想史の連続性とグローバル・ヒストリー」, 課題番号21K01608)の研究成果の一部である。唐津史に関する情報を提供して下さった唐津市教育委員会の岩尾峯希氏と久敬社塾塾監の山崎信也氏, 草稿を読んでコメントを下さった大日方純夫氏, 横山将義氏に感謝する。

天野為之の主要著書・論文・講述書

- (1884)『徴兵論』東京:東洋館.
 - (1886a)『経済学の必要』『中央学術雑誌』(21):1-8 & (22):19-24.
 - (1886b)『銀行原理』(東京専門学校講義録)『中央学術雑誌』(21)-(35)連載
 - (1886c)『経済原論』富山房. 複製版, 早稲田大学, 1961年.
 - (1886d)『商政標準』富山房.
 - (1890a)『経済学研究法』(政治学経済学法律学講習全書の内)博文館.
 - (1890b)『銀行論』(坪内善四郎編修)博文館.
 - (1891)『高等経済原論』(ジェー・エス・ミル原著/ジェー・エル・ラフリン編, 天野為之訳)富山房.
 - (1896)『経済学研究法』(ジェー・エヌ・ケインズ著)東京専門学校出版部
 - (1901)『勤儉貯蓄新論』(講義)寶永館書店 東洋経済新報社.
 - (1899)『財政学』(コーン著, 天野為之訳)富山房.
 - (1902)『経済学綱要』東洋経済新報社.
 - (1910)『経済策論』実業之日本社.
- 東京専門学校または早稲田大学出版部発行講義録(明治期 出版年次不詳)

参考文献

- 浅川榮次郎・西田長壽(1950)『天野為之』実業之日本社.
- Giffard, Sydney (1994) *Japan Among the Powers, 1890-1990*. New Haven and London: Yale University Press.
- 五野井隆史(2014)『鳥原の乱とキリシタン』(敗者の日本史14)吉川弘文館.

- Gramlich-Oka, Betina (2010) 'A domain doctor and Shogunal policies'. In Gramlich-Oka and Gregory Smits eds *Economic Thought in Early Modern Japan*, Leiden and Boston: Brill, pp. 111-156. 川口浩, ベティナ・グラムリヒーオカ編, 田中アユ子・安野正士訳『日米欧からみた近世日本の経済思想』岩田書院, 2013年.
- 早川和見 (2011) 『古賀藩』(シリーズ藩物語) 現代書館.
- 日野清三郎著・長正統編 (1968) 『幕末における対馬と英露』東京大学出版会.
- 池尾愛子 (2006) 『日本の経済学—二〇世紀における国際化の歴史』名古屋大学出版会.
- 池尾愛子 (2012) 「天野為之と『マクロ経済学』の形成—経済学史上の再評価」『早稲田商学』(431): 645-683.
- 池尾愛子 (2013a) 「天野為之と二宮尊徳の教義: 推譲, 仕法, そして経済教育」『報徳学』(10): 45-60.
- 池尾愛子 (2013b) 「天野為之」『エコノミスト』9月24日号, pp.48-49.
- Ikeo, Aiko (2014) *A History of Economic Science in Japan: The Internationalization of Economics in the Twentieth Century*. London: Routledge.
- 池尾愛子 (2015) 「天野為之と日本の近代化: 明治期の経済学者, ジャーナリスト, 教育者」『早稲田商学』(441/442): 313-329.
- 池尾愛子 (2016) 「天野為之編『実業新読本』: 発明, 国際貿易, 福澤諭吉」『早稲田商学』(445): 251-276.
- 池尾愛子 (2017) 『グローバリゼーションがわかる』創成社.
- 池尾愛子 (2020a) 「天野為之と東洋経済新報」『早稲田商学』(459): 1-50.
- 池尾愛子 (2020b) 「天野為之の商業政策について」早稲田大学産業経営研究所ワーキングペーパー No.2020-002, 2020年11月.
- 石井進・服部英雄編集 (2000) 『原城発掘: 西海の王土から殉教の舞台へ』東京: 新人物往来社.
- 岩井弘融 (1992) 『開国の旗手 小笠原長行』新人物往来社.
- 岩生成一 (2005) 『鎖国』(「日本の歴史」第14巻) 中央公論社. 初版, 1966年, 文庫本初版, 1974年, 改版, 2005年.
- 神田千里 (2018) 『島原の乱: キリシタン信仰と武装蜂起』講談社学術文庫, 中公新書, 2005年.
- 唐津商工会議所編 (2012) 『唐津探訪』唐津商工会議所, 初版, 2011年.
- 唐津市史編纂委員会 (1962) 『編纂唐津市史』唐津市, 非売品.
- 唐津市教育委員会 (2018) 「明治維新150年 唐津の明治維新と近代化」12月27日.
<https://www.city.karatsu.lg.jp/manabee/kyoiku/kyoiku/inkai/bunkazai/bunkazaihogo/karatu nomeijisintokindaika.html> (2021年2月8日閲覧)
- 木下恵太 (2011) 「天野為之について」YOMIMURI ONLINE.
<http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/culture/110914.htm> 2021年5月3日閲覧.
- 木下恵太 (2012) 「2011年度秋季企画展『早稲田四尊生誕150周年記念天野為之と早稲田大学展』」『早稲田大学史記要』43: 191-207.
- 北岡伸一 (2020) 『明治維新の意味』新潮選書.
- 小宮睦之 (1966) 『唐津藩』, 児玉幸多・北島正元編『九州諸藩』(物語藩史, 第2期第7巻), 人物往来社, 153-452頁.
- 真鍋重忠 (1978) 『日露関係史 1697~1875年』吉川弘文館.
- 松下芳男 (1956) 『明治軍制史論』全2巻, 有斐閣.
- 永積洋子 (2000) 『平戸オランダ商館日記: 近世外交の確立』講談社.
- 大日方純夫 (2016) 『小野梓—未完のプロジェクト』富山房インターナショナル.
- 小笠原宍岐守長行編纂会編 (1943) 『小笠原宍岐守長行』東京: 市川銃造 (非売品), 国立国会図書館

- デジタルコレクション. デジタル化日, 2010年3月31日.
- 佐伯弘次編(2006)『壱岐・対馬と松浦半島』吉川弘文館.
- 瀬野精一郎・新川登龜男・佐伯弘次・五野井隆史・小宮木代良(2012)『長崎県の歴史』第2版, 山川出版社.
- 衆議院事務局編纂(1892)『選挙干渉ニ関スル参考書類目録』国立国会図書館デジタルコレクション.
- 杉谷昭・佐田茂・宮島敬一・神山恒雄(2018)『佐賀県の歴史』第2版, 山川出版社.
- ジーボルト, A., 齊藤信訳『ジーボルト最後の日本旅行』平凡社, 1981年, 東洋文庫398 (*Ph. Er. Von Earnest Siebold's Letzte Reisen nach Japan 1859-1862*, von seinem ältesten sohne Alexander Freiherrn von Siebold, Berlin 1903. Verlag von Kisak Tamai, Herausgeber der Monatsschrift "Ost-Asien").
- Satow, Earnest Mason (1921) *A Diplomat in Japan*, London: Seeley, Service & Co. Limited. Reprint by Alpha Editions, 2019. アーネスト・サトウ著, 坂田精一訳『一外交官の見た明治維新』上下, 岩波書店, 1960年.
- 司馬遼太郎(1976)『花神』上中下, 新潮文庫.
- 司馬遼太郎(1983)『肥前の諸街道』(街道をゆく11)朝日文庫.
- 司馬遼太郎(2008)『壱岐・対馬の道』(街道をゆく13)朝日文庫.
- 司馬遼太郎(2008)『島原・天草の諸道』(街道をゆく17)朝日文庫.
- 末木孝典(2012)「明治二十五年・選挙干渉事件と大木喬任一佐賀県を事例として」『近代日本研究』(慶應義塾福沢研究センター)28:297~330頁.
- 高橋是清口述・上塚司編(1936)『高橋是清自伝』東京:千倉書房. 中公文庫, 1976年. 引用頁は中公文庫版.
- 辻達也(2005)『江戸開府』(『日本の歴史』第13巻)中央公論社. 初版, 1966年, 文庫本初版, 1974年, 改版, 2005年.
- 山本博文監修(2015)『江戸三〇〇藩物語藩史』洋泉社.
- 『末盧国』(唐津市の郷土史誌) インタライブラリーローンを利用したほか, 久敬社にて閲覧の機会をいただいた.
- 『国史大辞典』, 『世界大百科事典』, 『日本大百科全書』は, データベース「ジャパンナレッジ Library」に収録されているものを用いた.
- 国立国会図書館デジタルコレクション <https://www.dl.ndl.go.jp/>
- 平戸市生月町博物館「島の館」ウェブサイト (<https://www.hira-shin.jp/shimanoyakata/>, 2021年6月3日閲覧).
- 久敬社塾ウェブサイト <http://kyukeisha.com/about/history.php> 2021年2月12日閲覧.
- 長崎県ウェブサイト <https://www.pref.nagasaki.jp/koho/> 2021年5月3日閲覧.